

千刈狸の呟き

～ たった一つの薬 ～

“カッ・ポーン”と千刈狸の壺に郭公の鳴き声が響いて暑さが増してくると、蜂刺されて担ぎ込まれる輩がぐんと増えてくる。なんでも刺される蜂の種類はスズメバチ（窠のような大きな巣を作るのでカメバチと呼ばれているキロスズメバチ含む）、アシナガバチ、ミツバチが6：3：1の割合らしい。この蜂刺され、軽ければ皮膚が紅くなったり、蕁麻疹が出たり、痒くなる程度で済むが、重くなると狸の 千畳敷というように腫れに腫れて、咽喉が絞め付けられ息も絶え絶え、脈も飛んで血の気も失せて、遂には心の臓も止まって、毎年20～30もの人がこの世に別れを告げなければならない。この変化は刺されてから瞬く間に起こってしまい、一説によると、重い症状を呈した人の来院時間の平均は79分という報告もあるくらいで、とても病院にいる狸の治療では間に合わない。

そのためか、今年の3月初めにお上の火消し方より、「倒れた人がエピペン®を持っていた場合、本人が使用出来なければ緊急駕籠屋（救急救命士）は使ってもよい」とのお達しが出た。「尚、使用出来る駕籠かきは、講習会を受講して薬の性質や道具の使い方に関して熟知しておる者に限る」との但し書きが付いていたのだが、ところがこのエピペン®なる道具、「寺子屋の師匠（保健室の先生だけでなく、一般の先生方も含む）は、使ってよらしい」というお触れが、同じお上でも寺子屋方より一足先に昨年には出ていた。何でも食物アレルギーを起こして重篤な症状を呈する生徒もいるので、注意すべしということらしい。こちらは特に但し書きもない。

実はこの道具に含まれる効き目の元は、救命士が使用できるたった一つの薬であるアドレナリンだ。彼等は、心の臓が止まった時にこの薬を打ってよいというお墨付きを得るために、江戸時代さながら遠路はるばる筑前の国まで行って、一か月以上にも渡って講義や実習を受けていた。その時間数の多さに、ある狸は「たった一つの薬を投与するために、俺たちが受けた薬理の講義時間より長いんじゃないか?！」と冗談半分に話をしている。この薬補習、昨年より岩城亀田の火消し養成所で

も開催されるようになり、長旅をしなくても済むようになっていて、化橋も県お墨付きイの一番の由利本荘市K救命士といっしょに手伝いに出向いている。入校してくる者達の使命感は高く、朝！講義の前や、夜！講義の後にも鍛錬に余念がない。

こうして、多くのお墨付き救命士により狸の所に連れて来られる前にアドレナリン投与が始まった。確かに心の臓が再び脈を打ち始める人は増えた。そのお陰で、身内の人々が別れを惜しむ時を得られるようになった。しかし、生きて帰って、また以前の暮らしに戻れた人はまだいない。また狸の集まりでも救命士により病院前に投与した場合に成績がよいという証しはまだ上がっていない。その理由は、投与対象となる人にもあるが、1つは投与するまでの時間にもある。現場に出向いた彼等は、先ず倒れている人を観たのち必要な処置をして、それから病院に連絡して薬を投与するための静脈路確保の指示を狸からもらう。心の臓が止まった人では血管も見えづらいし、刺してよい場所も限られているが、何とか静脈路が確保出来たら、また薬を投与してよいかどうか狸から指示を仰ぐことになる。予め薬が詰まったたった一つの薬の筒を使って投与するのにこのようなやり取りが必要だ。ある報告では、倒れた人に駆け寄ってから（知らせを受けてからでなく）薬を投与するまでの時間が14分とされている。これでは既に勝負は着いている。エレキテル放電のような包括的指示で出来るようにならないのか？

交通事故などの外傷性ショックでは、1に出血、2に出血、3・4も出血、5に出血と言われる位、その原因の大半は出血だ。その対処は言うまでもなく輸液や輸血だが、現行では心の臓が止まるまで救命士は輸液を行うことが出来ない。また、低血糖に対するブドウ糖投与や重症喘息に対する気管支拡張薬の噴霧吸入も出来ない。遅まきながらこれらの3つに関して病院前でどのように施行したらよいとお上の養生所で検討が始まったようだ。今はたった一つの薬の使い方さえ雁字搦めの状態だ。どうせなら、倒れた人が以前の暮らしに戻れた喜びを身内の人といっしょに得られるようにしてほしい。
(化橋)